

ふるさと歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第四十六号 (二〇一〇年三月)

風に吹かれて (10・03)

白井啓治

『路の臺をきざみ 味噌汁に春の声』

今年は、正月早々から庭に路の臺が顔を出し、味噌汁に刻み込んだり、路味噌で熱々ご飯を頬張ったりして春の声を充分に褒めたのであった。ところが二月に入った途端、風邪をひき、身体は寝込むほどではなかったが考える気力の方が寝込んでしまった。これ程はつきりと風邪を自覚したのは十年ぶりぐらいである。

昨年までは、偶数月にことば座の定期公演を行っていたので、風邪などひく間もなかったのであるが、人間、暇が出来ると心身が鈍り、直ぐにウイルス等の外敵の餌食になる様である。

風邪をひいて知ったのであるが、風邪をひくとインスリン注射、血糖値を下げる薬などが効かなくなるそう、朝起きたときの血糖値が連日180に達し、これはいよいよ合併症を心配しなければならぬのかと覚悟を促されてしまった。

定期検査で、風邪をひくと血糖値が上がる話を聞かされ、更にヘモグロビンA1cの値がいつも通りであったので取敢えずは安心したのであったが、一度気力を寝込ませると、思考がシャキッとしてこない。三月の末までには、六月公演の台本を書

き上げなければならぬ。そのためのハンティングに村上山(龍神山)に登ってこなければならぬのだが、こんな調子では、一昨年、馬滝に取材で登って倒れたと同じようなことを起こしかねないので、なかなか腰が上がらない。天気が悪いのを幸いにして、ぐずぐずしている。

先月号に少し紹介したが、霞ヶ浦を囲む住人による一人鎖朗読会のための企画書も手につかず、つい二、三日前に、何とか書き上げ関係者の方達にやっと送った。ほっとする間もなく、この会報の編集をやっている。

まだ何か忘れていているようなのだが、それが何か思い出せない。これはいよいよ老人性記憶障害が来たのかと落ち込んでしまった。よく考えたら、介護保険料が自動的に年金から引き落とされるようになったのだから、そろそろ記憶障害が来るぞと言われている様なものだ。糞たれ! と声にした途端詰まっていた記憶が流れ出し、やらねばならないのが税の申告であった。

何てこった、二月の公演がなくなつたからといってのんきに身心を鈍らせている暇なんて本当はなかったのだ。隠居爺さんの様な暮らしの癖に、何と忙しいことが。死んだらゆっくり寝られるぞ、と嘯っていた罰なのかな、これは。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費として)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063

打田昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com>

「おかえりなさい・・いしおか」ふるさとして過した遠い日の「ひなまつり」を思い出させるようなとてもなつかしいひなまつり。『ただいま』「おかえりなさい」そう答えてくれる歳を重ねた母や父。本当のふるさとに帰ることが叶わなくともここにすれば『ただいま』と言えるあたたかなまち石岡。(いしおか難めぐり案内パンフレットより)

石岡市中心市街地商店街でのひな巡りは、昨年より参加店が増え11店舗となり今年で4回目を迎えた。

2月13日(土)、懐かしいボンネットバスの運行から幕開けした。石岡駅より、市内を30分でひとめぐり。私は14日(日)に、ぎんれい号と愛称されていた、昭和42年製造の雪の中を走る四輪駆動の暖房付。昭和60年に山形交通で任務を終えたその当時のままのバスに乘車。「発車オーライ」紺色スーツに身を包んだ車掌さんの声が聞こえてくるようだ。

エンジンの音も高らかに車内はお孫さん連れのご婦人。石岡駅より6号国道を走り、目地の交差点を右折。続いて守木町郵便局交差点を右折。まち蔵前停留所からは、ガヤガヤと男の子の集団でにぎやかになる。その中の二年生の男の子が「うん、幼稚園の時、乗ったバスのおいだ」と。間もなくイベント広場に到着。ここで座席も満席。立つ人も出てくる。次は八軒道路にある常設展示場のアークヒルズ石岡を経て石岡駅へ。

途中から手を上げて乗車した宇都宮からいらっしやった6代のご夫妻。帰りに真壁のひなまつりに立ち寄っていくとの事。

「石岡には古い歴史があります。歴史と合わせ、他のひなまつりにはない楽しさを味わって下さい」と声をかける。

昨年の情報センターでのひな飾りは、筑波山の絵を背景に『筑波嶺の春』をテーマとして曲水の宴と万葉集の掲示が。さすが歴史の里いしおからしいと感激しきりでした。

そして今年は何？ ワクワクしながらの入館

石岡の風と土、帰郷編「防人、還る」。早春の石岡の高浜港。防人崎守すなわち辺土を守る人の意。古代、多くは東国から徴発されて北九州の守備に当たった兵士()の任を終えた東国の武士たちを乗せた船が入港して来た。船上の人々は帰郷の喜びに満ち、無事を祝う石岡のまちは、ひなまつりのただなかにある。「ただいま」「おかえり」土産話と祝いの宴でまちは昼も夜も大にぎわいが続く。と題して県内各地から寄贈されたひな人形達が難壇から離れ、船上や港での喜びの大舞台が繰り広げられている。今年の飾り付けも圧巻お見事の一言でした。

その飾り付けの中にひっくりかえっているひな人形があった。わざと倒してあるのかと職員の方に尋ねると、海に落としてしまった弓矢の行方を船のへりから覗いているのだとの事。

職員の方曰く、人形も人間と同じで役割を与えると、不思議とその役割になりきってくると、飾り付けの大変さを楽しげに説明してくれた。なるほど一人一人よく見ると釣りを楽しんでいる者、日陰で帰郷を喜ぶ可憐なおひなさま等等など、思わず笑みを誘うドラマが展開されていた。来年は、どんなひな物語が繰り広げられるのでしょうか、楽しみます。

駅前常設展示場 アークヒルズ石岡では、「我がアークヒルズ号へようこそ」と題してキャップテンセバスチャン率いるバイレーツを乗せた船が黄金の国、ジパングに立ち寄り、世にも美しい人形達の中でチェスに興じている様子が飾られていた。そしてこの館内にひときわ目を引くものがありました。香丸町の山車人形、聖徳太子のお出ましでした。お祭りでは真近に見られない人形だけに、石岡のおまつりの人形の展示は、石岡らしさが加わって見学のみなさんに充分に楽しんで頂けたと思います。

そしてもう一つ、目を引く展示は市内の保育園児の手作りおひなさまでした。係員の方がおっしゃるに、出品の園児が揃って見学にきて、その前で「ひなまつり」の大合唱を披露。お子さんの心はよろこびとやさしさに包まれたことでしょう。

今年のひなまつりは残念ながら全部の出席を拝見することが出来ませんでした。毎回参加している店主さんは、飾り付けも色々工夫され、例えば、五人囃子の人形を円座させ、只今不景気対策談義中とか、思わずの笑いで楽しませてくれている。

覗くだけでなく店主さんの苦労話を伺いながらの見学は「あたたかなまち石岡」を満喫出来ることでしょう。

ここで伝統ある金物店の店主さんからの初出展のお話しをお聞きすることが出来ました。

以前から蔵の奥隅にある、まだ開けて見たことのない穴だらけの桐箱が気になっていたので、近所からはひな人形があるはずだから是非出展をすすめておられ、一大決心をして蔵の中を探してみることにしたのでさうです。その時、気に

なっていた桐箱を開けてみたのだそうです。

「もし箱を開けて白い煙が出たら、髪が真っ白になると困るので、直ぐに逃げよう」

ユーモアたっぷりの店主さんの話しに思わず身を乗り出してしまいます。

「軽いと思つて持ちあげた桐箱は、蓋がずしりと重く、これはむしろ…」

と色々な思いが巡り、期待を込めて開けた蓋の裏には、何と長さ90センチ、幅15センチの漆が塗られた炭がしっかりと付けられていたそうです。そして中にしまわれていたのは雛人形。明治20年から25年頃に江戸職人の手で作られたものだそうです。店主さんも生まれて60年余りはじめてのご対面だったそうです。

人形には虫くいもなく、保存状態は極めて良好で、話しを聞きつけた着付、装飾品、織物などそれぞれ専門の方々が、東京やつくば市などから見学に来られたそうです。

「明治の庶民の生活の知恵が雛人形を守ってくれたんですね」と店主さん。

明治、大正、昭和、平成と一世紀余りの世を、ひたすら息をひそめて、暗闇の中を虫に攻められることも無くよくぞ元気に生きぬいてくれたと愛おしく思いました。神々しく、おだやかな表情で、みなさんとの出会いを楽しんでいるかのようでした。

今年のひな巡りは、常陸國総社宮の参加と、総社宮の社宝公開、そして石岡市民俗資料館の参加。そして幕末の石岡を往く、ルネット散歩の催しと、歴史の里いしおかをも更にアピール出来たひな巡りで皆さん存分に楽しんで頂けたことと思います。

出展の店主のみなさん、携わった役員のみなさん本当にお疲れさまでした。色々な出会いをありがとうございました。

期間中限定のひな巡りの最中も香しさと甘さを楽しみながら美味しく頂きました。来年は、今年初節句を迎えた、恋瀬姫のコンテストや、恋瀬姫の最中は如何でしょうか。

・ 枝先にはっこり 春の夢 ちえこ

石岡つくばねマラソン大会 小林幸枝

二月二十一日、走りたかった石岡つくばねマラソンに参加することが出来た。昨年までは、ことば座の定期公演と重なり、参加申し込みが出来なかったのだ。

マラソンを走るのには二年振り。大会前に、ジョギングで体づくりをと思っていたのですが、明日から、明日からと一日延ばしにしているうちにとうとう大会当日を迎えてしまった。

ぶつつけ本番のマラソンなんて絶対にやってはいけない事だけれど、バレーボールは続けていたから、何もしないでのいきなり本番ではないから、今回は無理しないで完走を目指すことにした。そして、マーペースに走り、ゆっくりでいいから休まないで走り続ける、と言い聞かせながら、何とか完走を果たした。疲れて休みたくなつた時、ひらひらと蝶の舞いをイメージしてみたら、少し気持ちが悪くなり、走り続けることが出来た。完走はしたけれど、長い距離を走っていなかった。

たので、ランニングフォームがめっちゃくちゃで、股関節が痛くなるし、足の指先に豆が出来たりと大変な思いをした。でも、本当の罰は翌日にやってきた。

仕事に出かけようと思つたら足の親指の爪が紫色にはれ、靴が履けなくなっていた。サンダルで出かけたが、腰痛も起こり、駐車場に行くのにも大変。

4月4日は、日立さくらロードレースに参加することになっています。今度は、ちゃんとトレーニングをして走る事にします。週二回仕事に行っているギター文化館は丘の上にあるので、昼休みにジョギングをしようと考えている。登り坂、下り坂が続いているので、ロードレースのトレーニングには最適。それに、最近では公演に追われていないので少し体が緩み気味。絞らなくっちゃ。

桜の花の声援を受け、春風に背中を押されながら走るのには最高の気分。花の香に乗ってひらひら蝶の舞のごとく、走るゾゾッ！

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦
蕎麦会席料理のお店です
(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが
皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30~15:00
16:00~18:00

月・木曜日が定休日です。

電話 0299 43 6888

こんなテーマは、本来、プロの哲学者が取り上げる領域なのであろう。しかし、私もこの問題が、いつも頭を離れないので、今回触れてみたい。

人類は、自然の中では「特別の存在だ」という、錯覚に陥りやすい。人類はその辺の動物達とは根本的に違う。知能は発達し道具や言葉を用い、物事を創造できる。果てしない宇宙の彼方まで認識できる。自然界の成り立ちや諸々の法則なども、しっかり解明してきた。偉大な芸術も生んだ。神に近い存在だ！などと人類を高位に据え、尊厳を保ち、特別な存在として森羅万象に君臨しようとする。

文明の進化には、宗教の役割は大きい。しかし、聖人・高僧により、統(す)べられた聖域に心を置く人々なのに、それぞれの立場により、考えの違いから衝突が起こる。民族の誇りや経済の問題なども絡み複雑化し、異教徒間の激しい戦いにまで発展することもある。そういう事情を分析すると、人間の心の奥底には、自己主張を貫き、争って覇を唱える根源的な、なにものかが存在するように思われる。

通例、自己主張が昂じれば、自分達だけの絶対的な「神」を奉り、他は一切容認しない。容認しないだけではなく、他は邪悪なものとして、徹底的に排除しようとする。ついには過激な原理主義へと突っ走り、真つ向対決すれば、大規模な宗教戦争となる。

現在、世界の各地に、正に一触即発の局面に置かれているような関係の国々が、多数みられる。中東など、原理主義同士の間は、まるで爆薬倉庫の、ど真ん中にあるような感じがする。

のか？ 人間の本性とは、一体なんだ？ 人類史で、かくも憎しみ合いを続けるのは、なぜか？

私に言わせれば、それは、この世に生命が誕生した時からの、生き物の本性がそうさせているのだ。周りから、栄養源を奪い取り、新陳代謝と増殖機能を発揮し、生きるための方法を書き込んである巻物(DNA)に従わなければ生きていけない。

人間の本性は「善」であり、仁・義を先天的に具する…とする孟子の「性善説」は、私のように生命というものを、分子生物学的に理解しようとする立場の人間にとって、幻影に過ぎない。別に人間の性根は「悪」であると言っているわけではなく、他の生き物の命を奪って、己の命を全うしようとするのが、生き物の本性だと言いたい。肉食系だろつが、肉食系だろつが、他の命を頂戴しないことには、己の生命は持続できない。

1928年、イギリスのフレミングが発見した抗生物質「ペニシリン」は、ブドウ球菌を培養中、誤ってアオカビが培地に混入し、アオカビの周りの細菌が死滅していることが発端となり、見出されたものだ。アオカビは自分が生き抜くために、まわりのブドウ球菌により、栄養分を奪われないうよう、ペニシリン(細菌の細胞壁の合成を阻害。ヒトの細胞には細胞壁がないので無害)という毒素を分泌して、ライバルを殺し、己の生存を確保する。

このように、生き物とは、バクテリアであろうが、高等動物であろうが、常にライバルを倒し、己の命を全うするために、あらゆる機能を発揮して生存を図る。バクテリアもタテに36億年生きていたわけではない。そのような機能をしつかり獲得したもののみが、今日まで生き延びている。生き延びられなかった無数の生物は、石油・石炭となって埋没した。

ウィルスは自ら生存・増殖はできない。他の細胞の生存システムに依存しなければ子孫は残せない。従って、宿主を一発で倒す強力な寄生生物は、生き残れない。強すぎる者は生き残れない。ほどほどに共存できるもののみが、生き残れる。人間も同じ、盛者必衰の理(ことわり)と言われる所以だ。

人体は60兆個の細胞からなる。いわば連合体である。全体としては、個体の生命を維持するために、統制のとれた完璧なシステムを維持しているかに見えるが、個々の細胞間では、例えばリユーマチのように、自分自身の細胞を激しく攻撃して殺す。傷ついた細胞は殺される。

「アポトーシス」といい、プログラム化した自殺命令により、死んでいく細胞もある。皮膚や肝臓の細胞のように、消耗品として使い捨てられていく細胞もある。10億年前、生物の一部は、単細胞から多細胞生物へと進化した。多細胞の制御の乱れは、それ以来の宿命でもある。そして、狂って死ななくなった細胞が「癌」細胞である。

さて一方、現代社会は、飽くなき「利」の追求に奔走し、芸術・文化などより、まず経済至上主義。文化の僕(しもべ)であるべき経済が、主を退け、大威張りで、表舞台をのし歩く。

経済発展もいいが、社会ルールも品格もありやしない。世界の誰が困ろうが、おれさえ儲かればそれでよし。野に放たれた猛獣のように、ウォール街の野獣どもの「勝手主義」が、世界を混乱の渦に巻き込む。こんな現象が、一国の一地域に限定されるのなら、世界の善良な一般市民まで巻き添えになることはないが、今日の世界は、地球の裏側の事件が、すぐ翌日には、全世界に影響を及ぼす。

では、一体どうしてこんなことになったのか？

それは、人類が何百万年もの野生時代、腹を空かせて食料を奪い合って暮らしてきた野生の本能が、ついつい頭をもたげる。『オレの物はオレのもの、ひとの物もオレのもの』として、弱肉強食の本性を現す。親子兄弟でも食物を奪い合う野生の根性だ。

文明も大分進化し、食糧もある程度満たされてくると、人々は心穏やかに、神に近い慈愛に満ちた行動を取ろうとする。心の奥底には確かにそのような願望は存在する。しかし、もっと深い心の奥底には、野生の本能がガツチリ潜んでおり、平和な世の中でも、豊かな者は、より高次の豊かさを求め、際限なく欲を張り、醜い争いにまで発展していく。いつの世も、一部の力強いものにより、多くの弱い民衆は略奪される。これも洋の東西を問わず、時代の新旧を問わず、幾度も繰り返されてきた歴史の真実だ。

【中米の途上国の農民が、汗水流してバナナやパイナップルを栽培する。しかしその利益は、殆どアメリカ資本に持っていかれる。一人一日2ドルの生活の国を、長期滞りして、私はしみじみと見てきた。】人間の心の奥底には、恐ろしい本能が深く潜んでいる。生存に必要な食糧確保のため、最小限の殺生ならやむを得ない。野生の動物たちに日常見られる範囲内なら、許せる。しかし、過去、世界の歴史に残る幾多の残虐行為、アウシユウィッツ・ルワンダ・南京……数え挙げたらきりが無い。

更に人類は、乱獲により多くの動植物を絶滅においやつてきた。現在、滅びつつある種は数えきれないほどある。虐殺と乱獲、これほどまでに、凶暴で、自然破壊を平気で演じる人間の「頭脳」とは一体、何を目的に進化し続けてきたのか？

私に言わせれば、過去を悔いてもしょうがないが、そもそもその原罪は、人類が他の類人猿と枝分かれし、

700万年前、直立二足歩行を始めたこと。体重負荷を免れた前足は、自由な「手」となった。そのために、手を使うことにより、道具を作るようになった。道具を使えば、狩や採集がしやすくなり、栄養は豊になった。更に、40万年前「火」を使うようになり消化がよくなった。すると急速に大脳容積が増加し、発達した大脳は知能を働かせ、飢餓に備えて食糧を「備蓄」しようとする。欲の深いものは、より多く備蓄しようとする。それが昂じてライバルを倒し、必要以上に収奪するよう習慣づいた。

人類は本来雑食性である。動かない植物を収穫するのは簡単だ。しかし、動物を捕まえるためには、犬歯は退化し、扁爪（ひらづめ）で、五官はかなり退化している。目、鼻、舌、耳、そして触覚いずれも、野生の動物よりはるかに劣る。俊敏さもまるで劣る。それでいて、小動物はおろか、ついにはマンモス、クジラまでも仕留めるのだから、大脳をフル回転させざるを得ない。自然のバランスなど気づく前に、環境を破壊してしまった。地球上の異端児であり、奇つ怪な動物に進化してしまった。

【なお、人類は直立二足歩行をした「罰」として、肛門部に鬱血し、「痔」を患い、頭部の重みで肩がこり、上体の重みで腰痛に悩まされるハメとなった。】そして栄養の改善は、妊娠・育児など繁殖機能も向上し、爆発的に人口増加することとなった。更に大脳の発達には、生理的には発情周期などあったものが、セックスを、大脳で楽しむように変化をもたらした。他の動物には見られない、妊娠中でもオスを受け入れるという、異常事態となった。そして、フルシーズンで性の快楽を求めるようになった。文明が進み、高度社会に発展すると、ついには売春などまで発展し、新聖なる性は、子作りに関係なく、つ

いに「商業化」する乱脈ぶり。

そしてついには、食料資源の多寡で、産児数が決まる自然の掟は無視される。子供は、むやみやたらと生まれ、人口過剰は即、縄張り争いとなり、近隣と慢性的にいざこざが発生する。宇宙船地球号は、超満員でパンク寸前。人類は哺乳類で最大のポピュレーション（86億人）を持つ動物となった。

多少の飛躍はあるかもしれないが、人類の強力な欲望の源泉は、この辺にあるのだから。限りない欲望の増大。それをもたらした人類の大脳を、私は、「毒饅頭」と名付けている。この毒饅頭が、今日の全世界の不具合を生み出している。そしてこの毒饅頭の膨張が止まらない限り、平和な世界は訪れない。

そこで、こんな人類を見て、神様も怒り心頭に発し、見切りをつけ、近々に人類を地上から抹殺するか？ 代って地上の生物のリーダーを（私の推薦により）南米の超スローモーターの「ナマケモノ」にでも置きかえるかな？ 毎日木にブラ下がり、鼻提灯で居眠り。このスローライフが地球を救う。自然を略奪し、酒池肉林、暖衣飽食と、傲慢の限りを尽くせば、かならず天の鉄槌を食らうこと必定。

さて人間の本性を探るためには、人体の細部にまで立ち入るほかない。個々の細胞の中には、他から栄養を奪い取り、「代謝と増殖」という生命の基本原理解を、如何に全うするかが、DNAにしっかりと書き込まれている。「個体及び種」の命を長らえるために、どのような行動をとるべきかが、種ごとに、しっかりと刻みこまれている。生き物は、その基本原理には永久に逆らえない。

何億年もかけて、連綿とつながるDNAの大河の流れ。その中で「個体」とはなんだ？ 過去を受けて、未来へバトンタッチする人生80年とは一瞬の齒

車か？ 個体は消耗品か？ 「個体」の美貌や才能の有無など、何ほどのものなのか？ 懸命の努力で築き上げた些かの才能は、勿論遺伝などするわけもない。ほんの些細な小変化、そんなものが「個性」とか、アイデンティティとかいえるのであろうか？

こんな小さな私個人という存在は、何億年も続くDNAの流れの中の一瞬にすぎない。人生80年はDNAという鎖の一瞬の担い手「運び屋」にすぎない。親から引き継いだ「鎖」の「コピー」を作り、そのまま次世代に引き繋いでいく。DNAの鎖に大きな変化などあつたら大変だ。大きな変化は大方「死」を意味する。突然変異の殆どは、マイナスに作用し、プラスに寄与するのは稀。何百万年というタイムスケジュールで、ほんの少しずつ小変化を積み重ねて、やっと今日の人類という「種」が出来上がった。

その人類という種が、他の似たような種に比べ、何ほどの違いがあるといえるのか。少なくとも、生理・解剖学的には、ほとんど、なんの違いもない。分子生物学的には、他の動物と殆ど変わらない。

ヒトには「知性がある」と、人は言うであろう。知性があるから、芸術や文化を生み出せる。「道徳」も「愛」もみなぎっている。と心穏やかな方々はおっしゃるであろう。しかし、私のようなヘソ曲がり、到底そのような穏当な言葉には結びつかない。

その証拠に世界の歴史を紐解いてみてください。洋の東西を問わず、幾多も戦いの歴史が存在する。私に言わせれば、人類は狩猟採集の流浪の生活から、一定の地（最古はメソポタミア）に住居を定め、植物を栽培し、家畜を飼育し、集落を形成し、文明らしきものが芽生えてから、ほんの一年ほど。こんな短期間で、何百万年も、野生の厳しい生活をしてきた過酷な生活習慣が、簡単に改められるはずはない。

い。一朝一夕で聖人君子にはなれない。

【仏像は真鍮・鍍物等の下地に神々しさを増す為、薄い金箔を張り付ける。しかし風化で金箔は剥ける。下地は堂々と表に現れる。私に言わせれば、人類のわずか一万年の短い文明の歴史は、この金箔に相当する。基本は下地である。それが本性だ。争う本性と、平和を求める知性との戦い、それが人生か？】

さて、いかに文明が栄えようとも、いかに聖人賢人が尊い説教を繰り返そうとも、随所に過去の野生の本能が頭をもたげ、横取り・奪い合いの基本姿勢は変わることがないだろう。遠く、有史以前だろうが、近く戦国時代だろうが、またどんな国際協定が結ばれている今日だろうが、残念ながらこの基本姿勢は、変わることがなさそう。

その証拠は、人類にも些かの智慧があり、何とか争いのない世界平和を打ち立てようとして、色々の国際条約やら、〇〇協定とやらを締結する。しかし、それらがまともには守られた試しがありませんか？

更に凶悪犯罪・詐欺など一向になくならない。むしろ益々手口は巧妙化し、被害は増すばかり。人類は、神聖な特別の存在とするのは大きな錯覚だ。

世界は、ユートピアを目指して、どれほど試行錯誤を繰り返しても、決して成就することなく、むしろ各国のエゴは増すばかり。先日のCOP15での温室効果ガス削減のための協議の、無軌道さ・保身主義など、今の今の自国だけが大事と見える。

このような諸々を見ても、人類は神に近い、完璧に近い：などとは到底言えない。人間の本性は、結局のところ、他の生き物と何ら変わらない。

慈善行為や芸術・文化の発展は、サスガは：と拍手を送りたいが、ほんの薄皮の部分だ。私にそう毒突かれたくなければ、すべての人間が、もっと円満

な、えびす様のような顔になってみる。特にウオール街族は、何か「利」がないかと、ハイエナみたいな、キョロキョロした眼でうろつくのは止せ！

人間のあくどさに神様は業を煮やし、戒めのため、生命進化のストーリーを巻き戻し、700万年前の類人猿から、やり直しを命じるかもしれない。

或いは人類の傲慢さに腹を立て、ウイルスやバクテリアが本気で怒りだし、強力な鉄槌をくらわしてくるかも知れない。1918年のスペイン風邪や、今回の新型インフルエンザなど、ほんの小手調べ。もし人類に知恵というものがあるのなら、子孫達に『なぜあの時代に、目覚めてくれなかったのか』：と言われないよう、環境保全など、未来の生存基盤を、今、真剣に築き直すべきである。

ギター文化館

2010 CONCERT SERIES

今年もギター文化館が開設して18年になります。本年も魅力いっぱいのコンサート・シリーズを予定しております。御期待下さい。

- 3月21日(日) PM3:00~吉川二郎ギターリサイタル
- 3月28日(日) PM3:00~パパラサフォルクローレ・コンサート
- 4月4日(日) PM3:00~李波 馬頭琴リサイタル
- 4月11日(日) PM1:00~小原聖子コンサートとマスタークラス

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

Fax 0299-46-2628

呼び合うこととは心の通い合い 伊東弓子

前から思っていたことがある。

祖父、祖母、孫という言葉が、爺ちゃん、婆ちゃん、ちゃん、ちゃんと呼び合うことが何時かなくなってしまうのか、心配になっていた。家族の構成や家族の形も変わってきている。そこから繋がりまでも変化が生じて来ているように思えた。いろいろな状況が考えられるとしても人と人との繋がりには薄くなってきている中で心を育て合うことは出来るだろうか。今に始まったことではない。私等年代が子育てをしていた頃に既に根が生え出していたように思う。

日頃の気掛りを消すような嬉しい事があった。節分前日の夕方、孫のはーちゃんが、「自転車婆ちゃん、音楽会」の口だよ。」。十三日土曜日ね、シールが貼ってあるところね。来てね」

その言葉に胸躍らせて帰って来た。その晩、妹の孫のやまくんから電話があった。

「あんぐの婆ちゃん、明日ね、やまくんの幼稚園に来てね」

「何かあるの」

「うっん、ないけど来てね」

急に何だろう。あれこれ考えず素直に受けて行くことに決めた

その晩、私の覚えのある範囲の繋がりを書き出してみた。曾祖父以前は解らないが曾祖母のことは記憶にある。母が「あかばあちゃん」と呼び、可愛がって貰った思い出、大切な人だったことをよく話してくれていた。夫と私の祖父は既にこの世にはなく話しに聞いた中で想像していた。東北の貧しい農村のリーダーだった祖父、荒れ寺を中

興した祖父だったこと等だ。夫の祖母は二人とも遠く離れていて印象は薄かったそう。特に父方の祖母との繋がり、東北弁が理解できないまま上手いかなかったそう。私の祖母と一緒に暮らしていたので、「おばあちゃん」とよんで付いて歩いてきた。母方の祖母のことは、「てるおばあちゃん」「青森のおばあちゃん」と呼び、遠く離れていても手紙をよく出した。心通わせたよ思い出が沢山ある。

私の子供達はとうだったろう。近くにいる私の父母を、「おじいちゃん、おばあちゃん」と呼んだ。私が一緒に住むべき姑を、荒川沖のおじいちゃん、おばあちゃん」と呼んだ。生活の形や掛り方から呼び方にも影響があるかと考えると、すまないと思う気がする。

私達の孫はどうだろう。一緒に住んでいる孫は一人もいない。淋しい気もするが、寄ってきてくれるから満足だ。小さい時に「高崎じいちゃん、ばあちゃん」と言っていた子も大きくなって「おじいちゃん、おばあちゃん」になった。それでも偶に「じいちゃん、ばあちゃん」と聞くと快くよしい思いた。幼い孫が「自転車ばあちゃん」と呼んでくれるのがいつまでも続いて欲しいと思うのは、婆さんの甘えかな。欲張りかな。遠く離れた孫達は日本語で呼んでくれる。これは娘夫婦の気持が一杯入っていて嬉しい。

仕事をしていた頃気が付いたことがある。農村地域で大家族で生活していた子供達は、「隠居のじいちゃん、ばあちゃん」「ひいじいちゃん、ばあちゃん」「おおきいじいちゃん、ばあちゃん」「若いじいちゃん、ばあちゃん」と呼んでいた。祖父母の話題も多く暖かさに包まれている生活が見えた。

若い祖父母が増える中で、特にお婆さん達が「グランドママ」「マミニイ」「ママのママ」と呼ばせていたのも時代の変化の表れだろうか。

孫に対する呼びかけはどうだったろう。祖母も母も「ちゃん」つけで呼んでいた。父や夫は男の子にはちゃんづけしないで、名前だけで呼んでいた。私はこっそり愛称をつけていた。

呼び名は人と人との繋がり、長さ、深さを知る事が出来ると聞いたことがある。沢山呼ばれる。多くの人に呼ばれる機会を作っていつてやろう。

次の日はつきつきしながら出かけた。豆まきもすんで豆を食べているところだった。

「あんぐの婆ちゃんいくつ」

「六十九歳よ」

「うわあ、いっぱいだ。それより一つ多く食べな」

子供の中にどっぷり漬かって楽しい一時だった。この部屋にも春風が吹き込んでくるのももうすぐだ。

「やまくんの婆ちゃん、また来てな」

「違つよ。これはあんぐの婆ちゃんだよ」

「じゃ、あんぐの爺ちゃんもいるの」

と傍の子が言う。やまくんは得意そうにいう。

「うんいるよ」

「あんぐの爺ちゃんにも合いたいな」

とその子は言う。

「今度一緒に来るね。喜ぶよ爺ちゃんも」

こういふ言葉を聞いたら、夫はどんな心を動かされるだろう。火燧から腰を上げるだろう。子供の言葉が老人の心を暖かくしてくれる力になるのだからありがとう。

十日後はーちゃんの発表会に行った。仕事の頃

とは違って、つい我が孫中心に見てしまつ。一瞬一瞬目が離せない。終ると舞台の上で大きく手を振っていた。私にも胸のところを左右に振つてくれた。ちよつと違つ表現にも大満足だった。

「自転車婆ちゃん、ありがとつ」
「また遊ぼうね」

と別れて来た。涙が出てくるのだから可笑しい私。

祖父母との孫の間には独特の繋がりのあるのを改めて思う。孫達は自分で感じて表現する力を持つてやることだ、と改めて思った。

発音が充分でない中から生まれた「ばいちゃん」「やつこばちゃん」「あち」「あつぽ」もそうだ。
「あんぐの婆ちゃん」とあんぐの爺ちゃん」を繋いで考えてくれたのも、子供自身が生み出したものだ。

「あんぐ」が付いた理由もその一つだ。十年前のことだ。やまくんのお姉ちゃんが一歳半の十五夜の晩だった。前々から考えていた月見泥棒を始めた年だった。手拭いで頬冠り、上衣黒っぽい服、下は男物の股引き、草履で自転車で走つた。影絵の世界の主人公気分が怖いとは思わない。籠には芒、袋には柿、団子、蜜柑、栗、赤飯を入れて、お月見を忘れている家に置いてきたり、相手が欲しい物と交換したりして歩く。泥棒だから馬鹿をしても通じる家では失敬する。手をのばして頂く妹の家のガラス戸が開いていた。しめた。そつと手を伸ばし団子を口に入れた。その時一歳半のまあちゃんが目があった。

「ああ、あんぐ、あんぐ、あんぐ」
と騒ぎ出した。あんぐって食べちゃつた、と言

ふるさと風の文庫

新刊

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」(征服の大義)(1000円)
菅原茂美第二作「遙かなる旅路」(2) (定価:500円)
伊東弓子作「風のかげ」 (定価:400円)

打田昇三:ふるさと「風にたずねて」(. . .)
(定価:1000円)
菅原茂美第一作「遙かなる旅路」(1) (定価:500円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと
表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文集大成!!
ふるさと「風のことば」 (定価500円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を喰いたエッセイ集
兼平ちえこ「風に押されて」 (定価500円)
小林 幸枝「風に舞う」 (定価500円)
白井 啓治「移ろう風の中に」 (二冊組:800円)
近藤治平「風に吹かれて」 (二冊組:800円)

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館:0299-46-2457
・いしおか補聴器:0299-24-3881
にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局 石岡市石岡13979-2(白井方)
電話0299-24-2063

いたかつたのだらう。その前家族は、
「お月さまにあげてから食べるんだからね」
と我慢させておいたそう。食べられてしまつた一瞬の驚きは印象が強かつたよう。その晩は私一人が満足に浸つていたが、それから私を見ると「あんぐ」と指をさし、そこに婆ちゃんが呼んで呼ぶようになったのだ。あれから十年まあちゃんの妹も弟も一番末の弟も代々呼んでくれて

呼んだり呼ばれたり、キャッチボールを続けていく事が祖父母と孫、親子、夫婦、地域の人の心を育て合つ基になるのだらう。夫や私を可愛がつて呼びかけてくれた祖父母も、父母ももういない。今度は私等が呼びかける役目をする番だ。前に心配したようなことは吹き飛ばして接していこう。
曾祖母が「じいちゃん、ばあちゃん」と呼びだしてから百年以上経つた。幼い私が「お婆ちゃん」と後を追つた思いもずつと続けて孫達に渡してい

(2) 王朝と仏教

人間社会は何事にも表と裏があり、特に歴史は勝った者の記録に変えられるから真実が伝わり難いのだが、現代に続く日本の国家形態は「大化の改新」でほぼ形を成したように思えてならない。日本に伝わってきた仏教を素直に受け入れた「蘇我一族の王朝」は、中大兄皇子と中臣（藤原）鎌足を首謀者とするクーデターにより滅ぼされた。

このことは、仏教にとつて伝来早々の危機ではあったが、熱心な信者が一部の貴族、豪族などに居たようで「天皇」として登場した新政府も仏教を認めざるを得なかったと推定される。そして頻りに交流する朝鮮半島や中国大陸からは新しく難しい仏教の教義が次々と伝わり、奈良時代の西暦七百年代には南都六宗を中心に「仏教ブーム」などと言われるような現象が起こった。

奈良時代の始まりとなる平城京遷都は、聖武天皇の祖母に当る元明天皇時代の和銅三年（七一〇）三月十日である。それ迄の都は天武天皇以来、飛鳥地方各地であったから人々の思い入れも深い。疫病の流行や庶民の困窮による社会不安を抑え込んで、天皇制のもとに権力基盤を強化しようとする藤原不比等の思惑に反して、藤原京から奈良への遷都は全く評判が悪かったようである。

聖武天皇などは各地の行宮（あんぐう―仮の宮殿）を渡り歩いていて、ようやく腰を落ち着けたのは天平の中頃である。奈良が文字どおり首都になったのはその頃であろう。皮肉なことであるが国分寺建立とか大仏の建造とか大陸的、仏教的な

「天平文化」の花が開くのは聖武天皇が各地を回っているうちに閃いたアイデアに依るのである。天武天皇は天智天皇系から政権を奪って天皇になったけれども何人かの天智皇女を娶っており、皇后の鸕野讃良皇女（うのささらこうじよ）は後に持統天皇として即位する。天武、持統両天皇の間に生まれた草壁皇子は皇太子に立てられながら病弱で天皇になる前に死亡した。皇太子妃は持統天皇の妹で、やがて元明天皇となり文武天皇と元正天皇を生んだ。持統・元明両天皇の母親は蘇我氏の一族で右大臣を務めた倉山田石川麻呂（くら

やまだいしかわまる）の娘である。この大臣は熱心な仏教徒で法隆寺よりも古い奈良県桜井市の山田寺を創建したことで知られる。乙巳の変（いつしのへん）つまり大化の改新というクーデターに際しては中立を守り、後に身内の讒言で中大兄皇子に攻められたのだが、その際に山田寺にこもり「吾はいかなる仕打ちを受けるとも君王を恨まざるを誓う」と書き遺して家族と共に自殺したという仏様みたいな人物であった。その母方祖父の血筋を受けた持統、元明両女帝や元明天皇の娘の元正女帝、息子の文武天皇、その子の聖武天皇は熱心な仏教徒だと思いたいが、上代史を信用すれば、神仏を大切にしたのはむしろ天武天皇であつたらしい。この天皇は、現在まで伝わる伊勢神宮の式年遷宮を定め、始めて僧と尼僧が宮中に入ることを許し、諸国に触れを出して個人の家に仏像を置き経文を供えて礼拝供養することを命じており、自分が病気になった際に飛鳥寺や河原寺で経を読ませている。また側近の家に寺の掃除などをさせているが、これは自分でやらなければご利益は無いと思う。

鸕野讃良皇女などは、後で述べるが始めは神仏をも恐れないような強い女性だったようである。そうかと言って仏教を粗末にした訳ではない。即位してからは国分寺が置かれる五十年前に金光明経を諸国に配ったり、安居の講説（あんこのこうせつ）を内裏で始めたのはこの天皇である。安居とは釈迦時代の印度に起こった風習で、仏教の本来は釈迦が実践したように「只、ひたすら歩み続ける」修行なのであるが、雨期や猛暑期など遊行に出られない時期には僧が一家所に留まり修行した。雨の季節の「雨安居（うあんこ）」が知られている。それが寺院の原形なのであろう。

天武天皇と皇后との間に生まれた草壁皇子は先祖のために法要をしたり貧しいものに施しをしたり仏心に叶う行いが多かった。天武天皇の死後は、母親の皇后が後見して草壁皇子を皇太子に立て、一日も早く皇位に就かせようとしたが、草壁皇子は暇さえ有れば大勢の家来を連れては父親の墓前へ行き泣いてばかりいた。名前が草壁でもキリギリスのように草むらで泣いてばかりいてはしようがない。皇后は天智天皇に倣って暫く政務をみてから翌年の春に持統天皇として即位した。優しい皇子は三年後に死んでしまった。

持統天皇こと鸕野讃良皇后は、幾多の困難にもめげず自ら運命を切り開いていった女性のようである。「日本書紀」にも「深沈大度有（しめやかにしておおのりあり―落ち着きが有って広い度量の持ち主である）」と書かれている。これは褒め言葉であるろうし男性のような性格だったと思われる。天智天皇の次女として生まれ、十三歳で叔父の大海皇子こと天武天皇に嫁がされた。既に母親を同じくする姉の大田皇女が天武天皇の後宮に入ってお

り、二人の異母妹も嫁いで来る。やがて姉には大津皇子が生まれ妹には草壁皇子が生まれた。

鷗野讃良皇女は天智天皇が百済国を救援するため朝鮮半島に出兵した際には天皇と共に戦場まで出かけている。草壁皇子を出産したのは戦地へ向かう途中だった。やがて天武天皇の皇后となるのだが、天智天皇の病が重く皇位継承を巡る対立が深刻化して姉妹の異母弟に当る大友皇子と、姉妹の夫である大海女皇子との間に「壬申の乱」が起こった時には迷わずに夫に従い弟を敵にした。天武天皇の死に際しては我が子を後継者とするため、甥の大津皇子に無実の罪を着せて処刑した。

大津皇子は優れた人物だったようで万葉集に幾首もの歌が採録されており、特に辞世の歌「百傳ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ（ももつたういわれのいけになくかもをきょうのみみてやくもかくりなむ）」は有名である。其処まで強引な手立てを講じながら、期待した息子にあつさりとなつて死なれてしまった鷗野皇后であるが、そこは気丈な女性のこと次は残された幼い孫を皇太子にすることに全力を尽くした。

兄弟相続か父子相続かなど皇位継承の基準が未だ確立されていなかった時代であり、母親が違ふ天武天皇の子がやたらと居たので皇后といえども油断は出来ない。案の定、皇族会議では幼い皇太子に反対する意見も出た。それを抑えて皇后は七歳の孫の軽皇子（かるのおうじ）を皇太子とする決定を勝ち取った。この少年が聖武天皇となる。

その頃には仏教のほか中国に古くからあった孔子の教え・儒教が入ってきていて、始め聖武天皇はそれを学んでいた。聖武天皇が仏教を信じるようになったのは母親の藤原宮子とその妹で皇后と

なる藤原光明子の影響と、周りにいた皇族の干渉から逃避する為であろうか；やかましい舅（しゅうと）のような皇族の中心にいた長屋王（ながやおう）は、皇族では無い藤原宮子を皇后並みの敬称で「大夫人（だいふにん）」と呼ぶことを国会で問題視して、やがて藤原一族に消された。

名前は「長屋」でも一万七千坪に近い屋敷に住んでいたこの皇族は、藤原不比等と並ぶ大臣として政権を担っていた有力者である。父親は天武天皇の長男で、母親は元明天皇の姉、妻は文武天皇の妹であるから「怪しげな藤原氏の血筋を引く聖武天皇よりも皇位継承に相応しい」と自分では思っていたのかも知れない。庶民から見れば贅沢に暮らしている奴はどちらも怪しい。ただ、長屋王は仏教を信ずるに厚かった人物と言われている。

天平元年（七二九）二月、この御意見番が無実の罪で捕まり死刑の宣告を受けて妻子と共に自殺させられた。仏教を深く信じていたのに罪無くして謀反人となり処刑されたのでは話の展開に都合が悪い。そこで桓武天皇時代の初め頃に奈良・薬師寺の坊さんが選び出した「日本霊異記（にほんりょういぎ）」には「己が高徳を好み、賤形の沙彌を刑ちもちて現に悪死を得る（おのがこうとくをたのみ、せんぎょうのしやみをうち、もちてあらわにあくしをえる）」と言う長い題名で長屋王の悪い噂が尤もらしく記載されている。

聖武天皇が元興寺で法会を開き、長屋王は読経が終わってから寺の僧侶たちに食事を出す役目の責任者を命じられていた。役人たちが、大勢の僧侶がさしだす鉢に手際よく食べ物を配っている。

長屋王は椅子に座ってそれを監督していた。そこへ見慣れない沙彌（しゃみ）が現れて順番を待た

ずに役人の前に鉢を捧げた。「沙彌」とは寺院に入らず形だけは僧侶の姿になって在家の暮らしをしている者を言う。この時代には生活苦の為に、僧の姿で布施を求めて歩く者が多かった。この沙彌も、給食欲しさにやって来たのである。かなり腹が減っていたらしく身なりも粗末である。

これを見とがめた長屋王は顔色を変えて椅子から立ちあがり、その沙彌に近寄ると無言のままに持っていた笏（しゃく）を振り上げ頭を殴った。笏は贅沢な象牙で出来ていたから、殴られた沙彌の頭は割れて血が吹き出した。傷を抑えた沙彌は涙を流し恨めしげに長屋王を睨むと忽ちに消える如く姿を晦ました。人々はこれを見聞きして「悪しきことである」と噂した。長屋王が謀反人として捕らえられたのは二日後のことである。

この因果話は明らかに「長屋王事件」をでっち上げた藤原氏に追従して書かれたものであるが奈良時代以降、仏教が人々の心に「因果応報」「地獄極楽」の観念を植え付け始めたことが窺える。天皇を凌ぐ富（とみ）と権勢を誇った皇族が弁当の一つや二つで他人の頭をカチ割るのはおかしいし、何よりも役職とは言っても皇族が自ら給食の現場に立ち会っている筈は無いのである。

こうして反対勢力のボスが消され、数か月後には藤原不比等の三女・安宿媛（あすかべひめ）が晴れて民営化第一号の皇后として登場する。世に言う「光明皇后」である。この女性は早くから仏教を信じていた役得かも知れないが「白雪姫」のように評判が良い。身体が光り輝いていたとか、聡明で教養があり慈悲深く、施設を造って貧民救済に尽くしたなどと伝えられている。本当にそうだったのであろうか；

国家の記録である歴史はどうしても天皇が中心になり、ほとんどの史書には先ず天皇の良いところが書かれているのだが、正式な日本の歴史書続日本紀(しよくにほんぎ)には聖武天皇の記事として行宮巡りや国分寺建立・大仏建造などが目立ち天皇の人柄には触れていない。その代りに奥さんの「光明皇后」が褒められている。皇后は「幼時から才女の評判が高く礼儀作法を優雅に身に付け仏道を崇拜した」慈悲深く人々の救済に心がけた」という意味のことが書いてある。お習字も男性のように力強くて上手だったらしい。

ところが、専門の歴史研究者は良く見ているもので、「…続日本紀に、光明皇后は頭が良いとは書いてあるが、美人だとは言っていない…」と指摘した著書があった。確かにその通りで我々は「光明皇后」と言う名前でも前から絶世の美人だと思いつけていたようである。宮内庁からクレームをつけておくと、聖武天皇には皇后のほかに五、六人の側室が居た。ではなぜ、光明皇后を美化した伝説が伝えられたのであろうか?…

実は嵯峨帝の皇后・橘嘉智子(たちばなのかこ)の所伝と混同していると推定した説がある。年齢的には嘉智子皇后の誕生は光明皇后の死後三十年近く経っていて、藤原氏と橘氏であるから他人の筈である。ところが調べてみると両方の皇后に血縁関係がある。ややこしい話になるけれども仏教に関することなので触れておきたい。

嵯峨天皇は桓武天皇の次男であるが、兄の平城(へいぜい)天皇が悪女を近づけ「藤原葉子の変(ふじわらくすこのへん)」を起こして政治を混乱させた。そのために跡を継がされた自分が苦勞を

したから皇后には美人で確りした女性を選んだ。それが、側近である橘清友の娘・嘉智子である。清友の父の奈良麻呂は皇族の流れを汲む高級官僚であったが、権力者の藤原仲麻呂を追放しようとして失敗し、橘氏は没落していた。

藤原仲麻呂は、叔母の光明皇后から信頼されて大仏建造を推進し、その功績で出世して惠美押勝(えみのおしかつ)を名乗り権力を握った。やがて称徳天皇に謀反を起こすことになるので、橘奈良麻呂の読みは間違っていないからなのである。

奈良麻呂の父親は葛城王という。途中から母親の姓を継いで橘諸兄(たちばなのもろえ)を名乗り石岡に国分寺が建つ頃に内閣総理大臣に当る左大臣を務めていた。在任中に留学帰りの僧侶・玄昉(げんぼう)らを登用したのはこの大臣である。玄昉は聖武天皇の母親・藤原宮子の病気を看護したことで知られるが、留学から帰国する際に経典五千巻余りを持ち帰り、また自分でも千巻の経文を書写して仏教の普及に貢献している。

葛城王こと橘諸兄の父親は、三努(三野一みぬ)王と言い第三十代・敏達(びだつ)天皇の曾孫であった。敏達天皇は有名な推古天皇の異母兄で、かつ再婚した旦那だった。夫婦でも趣味が違う、推古天皇は仏教を擁護したことで知られているが旦那のほうは仏嫌いだっただけでなく、名前も知られてはいない。好き嫌いは仕方がないとして、この天皇と、古来の名族である息長(おきな)王の娘・広姫との間に押坂彦人大兄皇子(おさかひこ)のおおえのおうじ)が生まれ、飛鳥時代の皇位継承最有力候補だった。しかし即位前に若くして死亡したので、三代置いて息子の舒明(じよめい)天皇が当時の王権を相続したのである。

この系統が天智、天武から聖武、桓武などの歴代天皇に繋がってゆくので押坂彦人大兄皇子は現在の天皇家の始祖になる。日本の歴史は何度も歪められているから天照大神や神武天皇が天皇の祖先だなどと、夢のような話で国民が誤魔化されていて押坂彦人大兄皇子の名など誰も知らない。

その押坂彦人大兄皇子の弟に難波皇子(なにわのおうじ)がおり、孫が三努王なのである。三努王は若い中にある女性と結婚して葛城王などが生まれるのだが、その女性とは泉東人(あがたのあずまひと)という古い貴族の娘で「泉養三千代(あがたいぬかいのみちよ)」と言った。早くから女官として宮廷へ出仕し、持統天皇の信頼を受けていた。持統天皇は、皇太子として期待していた息子の草壁皇子を早く失ったので孫の文武天皇と軽皇子を寵愛しており、気心の知れた三千代を幼い軽皇子の乳母にしたようである。当然だが軽皇子の母である元明天皇と、元明天皇の娘である独身の元正天皇には頼られる。

元明天皇は三千代の功績に対して「橘」の姓を与え「泉養橘三千代(あがたいぬかいのたちばなみちよ)」と呼ばせた。かつて名字に特権意識が反映されていた時代には「四大姓」として「源平藤橘(げんぺいとうきつ)」つまり「源氏、平氏、藤原氏、橘氏」が挙げられていた。その橘氏は泉養三千代に始まる。三千代の息子の葛城王は先の読める人物だったようで、名目だけの王族であるよりは実質的な貴族になることを望み、母親の「橘姓」を継ぐことを要請して許され「橘諸兄」として臣下の籍に移ったのである。

橘諸兄の曾孫が橘嘉智子であり平安時代の大同年間に嵯峨天皇の妃に迎えられ、仁明(にんみよ)

う) 天皇と淳和(じゅんな) 帝皇后の正子(せいし) 内親王を生んだ。弘仁六年(八一五) 七月、三十歳になった嘉智子は皇后に立てられた。嵯峨天皇は自分の子供たちに「源(みなもと)」の姓と「一字の名」を与えて皇族から離脱させたことで知られている。その数は一説では五十人と言われており生んだ女性も三人や四人では追いつかないから忘れるほど多くの妻妾が居たことになる。

先祖はどうでも、皇族ではない橘嘉智子が商店街の籤引きよりも競争率の高い皇后に推されたという事は噂どおりの美人で才女だったようで、「風貌絶異にして、手は膝に過ぎ、髪は地に委す(ふうぼうぜついにして、てはひざにすぎ、かみはちにまかす)」と伝えられている。手が長いのは猿と間違われるが、理知的な絶世の美人で髪を長く伸ばしていたのである。深く仏教に帰依しており今は無くなってしまったけれども京都・嵯峨野に日本最古の禅寺である壇林寺(だんりんじ)を創建したので(だんりん) 皇后と称された。

「壇林」は「梅檀林(せんだんりん)」の略称であり基本的には僧侶の学問所、養成所を言うのだが鎌倉時代以降は禅宗など特定宗派の寺院も壇林と呼ばれるようになった。達磨大師が印度から中国に伝えた「禅の思想」は、留学した伝教大師(最澄) が受け継いで「天台禅」として日本に広められ鎌倉時代に宗派として自立する。橘嘉智子が皇后になった頃は、桓武天皇や嵯峨天皇などの庇護を受けた比叡山延暦寺が繁盛していたから壇林皇后は最澄の仏弟子だった可能性もある。

それはともかく、時代は少し違いますが仏教を深く信仰する二人の皇后が居て、どちらも頭は良いが本格的な美人だった壇林皇后・橘嘉智子の話と、そ

れなりの器量の光明皇后・藤原光明子の話が混ざり合って、信心深い理想的な美人皇后の伝説になったものと推定されるのである。それを裏付ける国宝の十一面観世音菩薩像が法華寺にある。

法華寺は、石岡市が自慢する常陸国分尼寺の総本山として総国分尼寺に指定されていた大和国分尼寺こと法華滅罪之寺の通称である。この寺は光明皇后が相続して別荘にしていた藤原不比等の屋敷を多額の税金で寺に直したもので「宮寺(みやでら)」と呼ばれていた。藤原氏の没落で権威を失い興福寺の末寺になって戦国時代の兵火に焼かれたけれども、豊臣秀吉が淀殿のおねだりで再建したのが現存する法華寺である。石岡には遺構しか無いが、さすがに本山は粘り強く、現在も真言律宗の尼寺(あまでら)として営業中である。

本尊の十一面観世音像は本体が基盤などを造る「櫃(かや)の木」の一木彫りと言われ、煤けてはいるが妖艶・豊満な姿形の像である。不肖にして作者は知らないが、制作年代は西暦八百年の前半と推定されているらしい。次にモデルは誰か? ということになるのだが、由緒のある寺の本尊を彫るのに近所のおばさんをモデルにはしないでどうから仏教を庇護した皇后から選んだ。該当する女性として年代的かつ美貌の点からは壇林皇后が、また当時の権力者・藤原氏と法華寺のつながりからは光明皇后が当て嵌まるのである。

多分、「観音像を彫れ」と命じられた彫刻家は藤原氏の手前、「光明皇后をモデルにします」と宣言してから、頭の中に壇林皇后の顔を思い浮かべて十一面観世音像を彫りあげたのであろう。そうしたこともあり、光明皇后と壇林皇后の事跡が混同して後世に伝えられるようになった。

それも道理、先に述べたように、この二人の皇后つまり藤原氏の出である光明皇后と、橘氏の流れを汲む壇林皇后とは、その系統がある女性を媒介として一致するのである。その女性とは持統・元明・元正の三女帝に信任され、奈良時代の後宮に君臨した県大養橘三千代である。

名前が長すぎるので「三千代」と省略して言うが、少女時代から宮中に勤務していた三千代は皇族の三野王と結婚して葛城王らを生み、離婚して藤原不比等と再婚した。天智天皇系から天武天皇に政権が渡って日陰の身であった藤原不比等は、天智皇女の持統天皇が即位するに及んで政界に進出することが出来た。政治力のある不比等は天皇にも信頼された。出世に対する思惑もあり女帝が信頼する側近の三千代に不比等が接近したことは容易に想像できる。或いは逆だったかも知れないが、ともかく三千代は不比等の妻となった。

高級公務員の妻となっても三千代は宮中の務めを辞めなかった。敵が多い持統天皇にとっては、気心の知れた藤原不比等と自分の側近である県大養三千代が夫婦になって仕えてくれれば好都合である。一夫多妻の時代であるから既に不比等には複数の妻が居り、常陸国の国司として勤務したことがある藤原宇合(ふじわらのうまい) など何人かの子が居る。再婚でも身分のある三千代は藤原不比等の正妻として扱われ数人の子を生んだ。その三女・安宿媛(あすかべひめ)、又の名を光明子こそ聖武天皇の夫人(ぶにん)として入内し、やがて皇族以外で初の皇后となる女性である。

それより先のこと、不比等が娶った妻の一人である賀茂氏の娘との間に生まれた娘が居た。名を宮子と言う。賀茂氏は古事記の三輪山神話にも登

場する出雲系の名族である。不比等・三千代夫妻は、幼い軽皇子が十五歳で文武天皇として即位した後、その夫人として宮子を後宮に入れた。少年天皇は、祖母である持統太上天皇と不比等・三千代に支えられて、**そつ無く**政務をこなした。都は現在の奈良県橿原市に在った藤原京で、持統天皇の朱鳥七年（六九四）に遷された本格的な都市であるが内裏や官庁街などは十六年しか使われずに奈良へ遷都されてしまう。国分寺のこともあって大きな声では言えないが、税金の無駄使いは当時から日本の伝統だったのであろう。

十五歳で即位した文武天皇が成人式を迎えた頃に支えてくれていた持統太上天皇が五十代で亡くなり、若い天皇の実力が問われることになった。頼りなさそうな文武天皇は藤原不比等らの補佐を受けながら公務員制度改革など今の政党に教えたような施策を実行している。持統太上天皇の遺体は大寶三年（七〇三）の暮に天皇としては最初に火葬に付された。それより三年前に法相宗を日本に伝えた元興寺の僧・道昭が火葬されこれが日本初と言われる。仏教の普及で釈迦の死滅以来、遺骨や遺物を崇拜する考え方から日本でも次第に火葬が行われるようになったのである。

慶雲三年（七〇六）の冬、文武天皇は病の床に臥すこと半年余りで二十五年の生涯を終わった。後継ぎは藤原宮子との間に生まれた「首（おびと）皇子」が居るのだが、未だ幼稚園に通っていた。天皇は病床に母親の阿閉（あへ）皇女を呼び、自分の死後のことを相談した。阿閉皇女は天智天皇の第四皇女で、持統太上天皇の妹である。甥の草壁皇子の妃となり、文武天皇と三歳上の姉である氷高（ひたか）皇女を生んでいた。

文武天皇は自分が助かる病状ではないと判断して皇位継承のことを相談したのである。後継者は首皇子なのだが未だ幼い。皇位継承権を持つ他の皇族たちを抑えるために祖母の持統天皇の例をひいて「自分の死後は母親に即位して貰いたい」と願ったのだが、阿閉皇女は固く辞退をした。個人経営の会社と違って「後は任せなさい！」と胸を張る訳にもいかないのである。母親の辞退が原因では無いが、文武天皇は納得がいかないままに息絶えた。そうなるかと理屈を並べてはいられない。

阿閉皇女は大勢の皇族・官僚を集めて「自分の本意では無いが、先帝の遺詔に従って即位する」旨を宣言し第四十三代・元明天皇となった。この時、天皇は四十歳代の後半である。新聞には出ていないが、何人かの皇族が恨めしそうに睨んでいたことは間違いないであろう。この天皇の時代に評判の悪かった「奈良遷都」が行われ、古事記や諸国風土記が作られた。

治世八年、五十歳を過ぎて疲れた女帝は退位を決意した。皇太子の首皇子は十五歳になっていたが、誰が言い出したか「即位は未だ早い」として文武天皇の姉である氷高（ひたか）皇女が元明天皇から「天皇になれ」と言われた。始めは拒否したのだが、説得されて承知し「先帝の命を受け、あえて他の人に重責を押し付けるようなことはしません」と決意を述べ、元正天皇として即位する。重臣の藤原不比等は日本書紀が完成した養老四年（七二〇）に他界し、翌年には元明太上天皇も薨じて元正天皇は後盾を失ったが、舎人（とねり）親王、新田部（にたべ）親王など高齢ながら穩健派の文武天皇皇子たちが政治を支え、藤原宇合など不比等の子らも実力派の中級官僚として台

頭してきた。養老七年の秋には、白い亀が内裏へ届けられ「国の瑞祥である」として翌年の年号が「神龜（しんき）」に変えられた。

元正天皇はそれを機に甥である皇太子・首皇子に皇位を譲る決意を固めた。藤原不比等の娘・宮子を母として生まれた文武天皇の第一皇子であり、この時、二十四歳に達していたから、**うるさ型**の皇族たちも文句は言えない。神龜元年（七二四）二月四日、首皇子は大極殿に於いて即位し第四十五代の聖武天皇となる。即位の翌年、天皇は藤原不比等と具犬養橘三千代との間に生まれた安宿媛こと光明子を娶る。いよいよ国分寺建立など仏教の隆盛期が到来するのである。

||終||

（第二話資料）国分寺余話関連年表

西暦六九〇年（持統天皇時代）

この年に初めて宮中で「安居の講説（あんごこのこうせつ）」が行われた。

六九二年

唐の国の大使が、亡き天智天皇のために献上した阿弥陀如来像が九州から届いた。

六九三年

諸国の寺で、仁王経を四日間、講読させた。

六九四年

金光明経・百部を諸国に分け、毎年、正月には講読することを命じた。

六九六年

天皇の前でも金光明経の講読を行わせた。

六九七年

文武天皇（十五歳）が即位、祖母の持統天皇が後見した。やがて藤原不比等の娘・宮子が

入内した。宮子は聖武天皇を生む。

七〇〇年

有名な三藏法師に師事した日本法相宗の祖・道昭が没し、初の火葬に付された。

七〇一年

この年に聖武天皇と光明皇后が生まれた。

七〇三年

持統太上天皇が薨じ、天皇として初めて火葬に付された。

七〇七年

文武天皇が薨じて、その母親である元明天皇が即位した。(聖武天皇が幼少のため)

七〇八年

藤原不比等が右大臣となり平城京(奈良)への遷都論が浮上してきた。

この年に不比等の後妻となって光明皇后を生んだ「県犬養三千代」が元明天皇から「橘」

七一〇年

の姓を賜わり「県犬養橘三千代」と名乗った。

七一二

平城京へ遷都

七二二

古事記が完成

七二四年

文武天皇の第一皇子・首(おびと)親王が皇太子に立てられた。

七二六年

元明天皇が娘の氷高皇女に皇位を譲り、皇女は元正天皇として即位した。元明天皇は太上天皇として天皇を後見した。

皇太子の首皇子は十五歳になっており、藤原不比等の娘・安宿媛を妃として迎えた。

この年に派遣された遣唐使の一行に僧侶の玄

昉が加わっていた。

七二七年

諸国に於ける僧侶の不祥事が問題となり、元正天皇が戒めの詔を出した。

七二八年

遣唐使が戻り「金光明最勝経」が齎された。

七二〇年

藤原不比等が死亡し藤原氏は武智麻呂、宇合ら不比等の四人の子が皇太子生母・宮子の威光を背景として台頭する。

七二四年

(ここからは第三話にも関連する) 元正天皇が二十四歳になった首皇子に皇位を譲る(聖武天皇の即位)

七二五年

藤原宇合は常陸守として石岡に勤務した後、蝦夷征討の將軍として東北地方に遠征、年末には都へ戻って要職に就いた。

七二六年

都の近辺で三千人を出家させ諸寺院に住ませた。目的は蝦夷との戦いにおける戦没者の慰霊と禍いの除去にあり、十七日間の読経と写経が行われた。

七二七年

この頃、僧の行基(道昭らの弟子)が、政府の弾圧を受けながら民衆教化、社会活動を盛んにして「行基菩薩」と崇められるようになり、政府は東大寺建立に利用する。

七二八年

聖武天皇と妃・安宿媛(光明子)との間に基(もと)皇子が誕生し、直ぐに皇太子に立てられた。

七二九年

長屋王(天武天皇の長男・武市皇子の子)が無実の罪(反逆罪)で家族と共に自殺に追い込まれた。これにより反対者が亡くなり、藤原氏出身の光明子が皇后に冊立された。

七三〇年

この年、東海道など七道の主要な国に命じて仁王経を講読させた。

七三三年

孟蘭盆の供養が行事化された。

七三五年

この頃から諸国に天然痘が流行し死者が出た。遣唐使に従って留学していた僧・玄昉が経論五千巻を持って帰国し、同時に帰国した吉備真備(きびのまきび)と共に政治に関わった。

の政務を止め、年末に金光明経六四〇巻を作らせて諸国へ配った。(当時の国は六十四か国)

七三六年

唐の国から「華嚴経」が伝えられた。

七三七年

天然痘のため藤原兄弟など多くの公家、官僚などが死亡した。

七三八年

光明皇后に男児が誕生する見込みが無く皇女の阿倍内親王が皇太子に立てられた。

七四〇年

国ごとに法華経十巻を写し、七重塔を建てるように命じられた。

九州(太宰府)の次官として赴任していた藤原広嗣(宇合の子)が、天皇側近から玄昉らを排除するよう求めて意見書を呈上し軍勢を集めたが、反乱として討伐された。

七四一年

聖武天皇は現在の京都府郊外に造らせた「恭仁（くに）京」へ遷り、それから難波宮や紫香樂宮を廻るなど異常な行動を示した。そうした中で諸国には国分寺建立などの詔が出された。

壇林皇后（橘嘉智子）関連

七八六年（桓武天皇の延暦五年）

桓武天皇の第二皇子（神野親王）として嵯峨天皇が誕生した（母親は藤原宇合の孫・乙牟漏

漏 桓武帝皇后）

同じ年に橘氏の娘（県犬養橘三千代から五代目）として橘嘉智子が生まれた。

八一五年（嵯峨天皇の弘仁六年）

神野親王の妃であった橘嘉智子は嵯峨天皇の皇后に冊立された。

ことば座「風の塾」生徒募集！

ことば座では、暮らしの中で自分を発見し、表現するための後押しをする教室「風の塾」を開いています。

絵と一行文教室

詩を手話で舞う「朗読舞教室」

朗読教室

エッセイ教室

（各教室は月二回の授業。受講費月額3,000円）

詳しくは下記「ことば座事務局」（担当：白井）までお問い合わせください。

☎0299 - 24 - 2063

補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。（石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可）

石岡市石岡2158 6

☎0299-24-3881

歴史・文化の物語を朗読に聞く夕べ（毎月第二土曜日 19時より）

いしおか補聴器では、らふるさと風の会、ことば座の協力で、ふるさとの歴史・文化の物語を、囲炉裏を囲むような形で、朗読に聞く「ふるさと知ろう会」を開催しております。

3月13日の第4回朗読会は、打田昇三作「興亡の連鎖（その一 謀反への誘い）」です。

「現在の石岡市が元気が無いのは、古代の国府だったこの地に連綿と続いた豪族が六百年前の事件によって没落してしまったことに遠因があるように思えてならない。そこで一つの歴史として当時の事を振り返ってみたいと思う」に始まる打田史学による石岡考証物語。

定員は10名程度となりますので、ご予約の連絡を頂ければと思います。

朗読後、作者を囲んでのお話し会があります。

朗読会参加料金 1,000円（コーヒーorお茶、お菓子付き）

4月10日の第5回朗読会は、「興亡の連鎖（その二・権威の迷宮）」です。石岡の大掾一族が滅亡へひた走る戦乱の世の物語を、打田史学に考証して行きます。

ふる里とは「物語の降る里」。

ふる里は次の世代に残さねばならない文化と希望の玉手箱。

【特別寄稿】

私のスペイン旅行記(1)

ギター文化館代表 木下明男

事の起り

一昨年末、いつも企画を配給してくれるT・T氏より、スペインのリナレス市で開催される『セゴビア国際ギターコンクール』の優勝者のコンサートを行いますか？との提案を受ける。詳しく説明を求めると、T氏より『セゴビア国際ギターコンクール』の優勝賞品としてギター文化館でのコンサートを授与する…の案が持ち上がった。との話。ちょうど二〇〇九年の企画検討中であつたので、十二月の企画として「アンドレイ・パルフィンヴィッチ」(二〇〇六年『セゴビア国際ギターコンクール』の優勝者)についてはギターリサイタルを開催し、コンクールの賞品については暫しの考慮時間を求めた。後日、その件についての回答を求められ快諾をした訳です。

(毎年スペイン、リナレス市主催のセゴビア国際ギターコンクール優勝者のコンサートをギター文化館で開催する)

するとT氏より、更なる提案がされたのです。

リナレスのセゴビア国際ギターコンクールでの審査員をして欲しいとの要請でした。即座にそれは無理と断つたのですが、大丈夫T氏が常時付き添うことを約束してくれたので受諾したのです。折角、スペインまで行くのなら同行者を募集し、ギター文化館ツアーを計画する事にしたのです。前年もツアーを募集したが、折からの不況とガソ

リン高騰で燃料サーチャージが発生し割高感で実現できなかった。今度も反応はあるが、やはり不況なのか皆二の足を…？それでも、二人が同行を決めてくれ、別のグループツアー(神奈川県の大田リスト集団の演奏旅行)と一緒に旅行が成立したのでした。十一月十五日出発なのに、前夜まで仕事で、前日にやっとスーツケースやカメラ、下着等を買った。夜中に慌てて荷物作り、ピアニストのTさん経由で現地情報として、グラナダは寒いとの連絡を貰い、防寒具をいっぱいトランクに詰め込む。やっと安心(不安かな?)して、一杯やりながら床に就く。

十五日出発日当日、嫁さんに羽鳥駅まで送って貰う。常磐線で成田まで行き、成田線で成田駅→京成線→空港の予定。天気良好、昨日の嵐が嘘の様だ。窓外を望むと、雲一つ無い真つ青な秋空が見える。その空にくっきりとした筑波山を従え列車は走る。線路際に鮮やかに色づいた柿ノ木が飛ぶように去って行った。

成田で、同行のI・N先生と初対面そしてご挨拶。他にI君、T君、E先生にも挨拶。こちらの同行者も到着、YさんとMさん全員揃う。愈々搭乘、KLM機アムステルダムまで十時間、飛行機の中は何もやることなし、狭いところに閉じ込められ頻りに食事が出る。まるでプロイラーの鶏舎状態! やがてアムステルダムに到着。今は即圏なので、ここで入国。機を乗り換え、二時間後マドリッドに向けての飛行。今度は三時間の旅、相変わらず食事はかなり出る。最近の時計や携帯等の機械は、頭が良い? こちらが操作しなくても勝手にスペイン時間に変わっている。

I初めてのスペイン

夜中にマドリッドの空港に到着、寒いと聞いていたのに一向に寒くない。出迎えるT氏は、ここ二、三日暖かくなつたと言いつつ。兎にも角にもスペイン、マドリッドに始めて足を踏み入れる。迎えるの車に乗り込み、一泊目のホテルへ(アグマールホテル)向かう、マドリッドはスペインの首都、人口600万位の大都市。車は多く、街も雑然として都会は世界共通なのだろう。

翌日市内を散策するが、十一月と言うこともあり、広場などにはクリスマス飾り付け準備が目立つ。都会では他のヨーロッパの都市と余り変わらない。

マドリッドのホテルで、仲間に外貨交換をした日本円(7万円程度)を、朝食時に(バイキングスタイル)テーブルに忘れてしまった。(私はユーロ貯金をしていて関係で多額のユーロを持参していた。)自室に戻ってから、そのお金が無いことに気がついて懸命に探したが諦めていた。ほぼ一日経ってから、駄目元でフロントに聞いたら驚いたことに届け出があり、現地の人も皆驚いたサプライズでした。

翌日マドリッドからマラガ(南の都市)へ向けて新幹線に乗る。高い天井の駅広場の真ん中にオアシスのような緑が有り、旅人を和ませている。1等車(グリーン)専用の待合室がありビール・コーヒーを含む飲み物が無料、勿論お飲み物も無料である。リッチな気分です。新幹線に乗り、食事つき、速度は300km/hまで出していた。

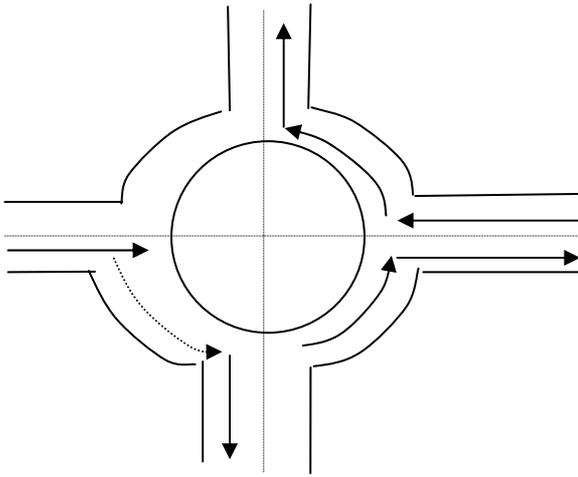
外の景色は、日本の様な潤いのある景色は無く、野も山も砂漠のような荒地に人工的に植林した一面のオリーブ畑。時々人家や町並みが見えても、

アメリカの西部劇に出てくるような集落的な街。これは、私の感じたイメージです。

今回のツアーは、井桁先生（ギターリスト）たちのコンサートツアーに同行という形になり、当初のスケジュールと変わったり色々こんな管では…？ ハブニングの連続で、ほとんどプライベートツアーの様相でした。マラガの駅から、タクシーでアムニユルカムのホテルまで移動。移動中に感じたスペインでの交通事情。

II 交通

感心したのは交差点、右も直進も左もどの方向に行くのにも全て右折と言う方式。△右流は左優先、走っている車の前を横切ること是一切無い。面白い方式なのに感心をした。



ヨーロッパでは、ごく自然にある方式だそう。始めは右側通行が怖く、またこのロータリー式交差点もどう動くのかわからず怖かった。都市か

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声（音）を
自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で・・・また大好きな雑木林に一滴の土を分けてもらい、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、
連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜 2 4 6 5
0299-55-4411

ら都市を結ぶ高速道路網（アウトバーン）は、制限速度があるのかと思うほど飛ばず。メーターを見ると優に 160 キロオーバーで、しかも車間距離を取らない。追い越すときは、直前まで詰めて交わしていく。本当に怖い！
マドリッドやグラナダの都会では、ほとんど日本と同じ渋滞で変わりがない。マナーも決して良いとは言えない。また、都会ではタクシーは手上げれば、すぐ捕まるし、程よい交通機関のよう、便利だ。観光地への移動は、鉄道や路線バスも整備されているようだが、マイクロバスやタクシー等のチャーターが便利のようだ。（続く）

【風の談笑室】

先月号にも書いたが、最近編集事務局に色々なお電話やメールを頂くようになった。大変嬉しいことである。

先週、北荒川沖の方から、ゆりの里で会報を見て手にした所、表紙の1ページと最終ページじがなく、中のページが読みたいのだけれど、土浦市には置いてないのか、というお電話を頂いた。当「ふるさと風」も最近では、いろいろな所に置かせて頂けるようになったが、土浦には残念ながら置いていない。それで、早速二月号を送らせていただきました。

以前よりゆりの里は、会報をお持ちいただく人が多く、多めに置いてあるのだけれど、直ぐに無くなってしまう。他市他県の人も多く、お風呂に入りのおんびりとくつろぎながら、会報も手にして頂けるのである。ただ、どういふものが毎回表紙だけを持っていかれたり、中のページだけを持っていかれる人が多い。おそらく口ビーで読んで頂き、そのまま放置されたものを職員の方が元に戻してくれているので、表紙が無かったり、中が無かったりするのである。しかし、いずれにせよ手にとって読んで頂いているのだから、有り難い事である。

昨年十二月より、風の会の応援者・木村進さんのご好意で、ホームページが開設されたのですが、開いて見る度に内容が追加・更新されています。打田さんが、石岡市報に投稿されている文なども纏めて、載せて頂いています。ことば

座の公演写真等もフリードで紹介されており、とても楽しい構成にして頂いております。編集者を含めて、風の会の皆は、自分の原稿をワードに打つだけが精いっぱい状態なので、木村さんのような応援者がいて下さって、大変感謝しております。おかげで、仲間達からも、ホームページ見たぞ。まだボケ老人にはなっていないようだな、などと悪態の首信などを買うようになりました。是非一度ご覧いただきたいと思ひます。

先日、これも色々な形で「ふるさと風の会」を応援くださっている、いしおか補聴器の阿部さんから、桜の頃に、兼平ちえこさんの「常世の国の五百層」の展示会を、何度かに行わたくしに行きませんか、と言われた。まだ、兼平さんには、話してはいないけれど、独断で宜しくお願ひしますと「五百層展」を快諾してしまつた。

いしおか補聴器さんには、会報、文庫、ふるさと風の小窓等を展示、販売をして頂いたり、今回(3月13日)で4回目になりますが、ふるさと歴史文化を朗読に聞く夕べを開かせて頂いています。この朗読会は、「ふるさと知ろう会」というのが正式名で、朗読を聞くということよりも、ふる里を雑談するきっかけとして朗読がある、というものです。

囲炉裏を囲んでお茶を飲みながら、ふる里についてワイワイガヤガヤと雑談考証しようという会で、毎月第二土曜日の午後7時から行っています。

いしおか補聴器さんは、石岡ではただ一軒の補聴器の専門店で、自分の聴覚特性を検査しても

らうことができ、単純に音量を上げて聴力を得るのではない補聴器の選択をしてもええです。この風の会の会報を見てくださいましたと言つて頂くと、特別サービスを頂けるこの事です。

2月19、26日のこと。ことば座の行っている「朗読舞」について、NHK水戸放送局の若いディレクターの取材を受けた。

今年は、何とか小林幸枝さんの朗読舞をもっと多くの人に、また全国の人達に知ってもらいたいと、いろいろな話を積極的に受けようと思つている。

小林幸枝さんが手話をベースにした舞で表現する舞台は、世界でこの石岡にしかないもので、現在、この朗読舞を演じられるのは、小林さん一人である。しかし、そのことをこのふる里で幾ら声にしても、なかなか振り向いてくれようとなし。まあ、何でも地元、お膝元が一番最後と言うから、仕方がないであろう。

昨年までは、三年間にわたつて、ギター文化館で年6回の公演をこなしてきたが、今年からは、第一ステージと言うことで、年2回の公演として、これまでよりさらにスケールアップした小林さんの舞台を見てもらおうと考えている。そして、同時にこれまで少し疎かにしていた広報活動を積極的に展開させていこうと思つている。

さて、NHKのことに話を戻すが、取材に来た若いディレクターに宮田輝さんのことを話したら全く知らなかった。考えたら私の息子達よりも若い彼等には当然知る由もないだろう。高橋圭三さんの事も知ってはいなかった。

宮田輝さんで思い出したのであるが、まだ脚

本監督として一本立ちして直ぐの頃であった。一般的には、私はかなり早い一本立ちで、同年代の者達はまだ助監督のサード、セカンドであった。

当時、宮田さんは、NHKの天皇とまで言われたアナウンサーであった。官庁関係の何かの広報映画だったと思うが、宮田さんをサレーターに起用、というか先方のご指名だったように思う。

読み方が違つたとNGを出したら、宮田氏がむくれた顔をし、プロデューサーが取り成すように勝手にOKです、と言つたのだった。

若造ではあるが当然私は怒つた。「俺が監督なんだ。俺が駄目だと言つてるのだから駄目だ。勝手にOKするな。それが嫌なら俺を首にしな。その代わり俺の撮つた絵は使わせん」と。

勿論、宮田さんは読みなおしをしてくれたが、当時は仲間内では、スゲエ度胸、とかなり噂に上つたものだった。…そんなことを思い出しながら、俺も相当歳をとつたんだな、と実感させられた。

当時は若く、人一倍血の気が多かつたが、しかし直ぐに怒る癖と言つたが、性分はまだ治つてはいない様である。幾つになつたら穏やかな物分りの良い爺さまになるのだろうか。

先月号から、この談笑室というコーナーを設けることにした。雑木林の話題で良いと思つている。大木に育つような話題でなくてもよい。腹を立て文句を言いなから最後には笑つてしま

う。そんな話を提供して頂きたいと思つています。会員だけの話でなく、いろいろな方

の雑談をお寄せいただけたいと思います。

ことは座の主宰している塾の朗読教室に二年半通われている兼平良雄さんが、この春から「平家物語」、全百二十句に挑戦することになった。秋口辺りから、平家物語を語る会を定期的に開くことを目標にスタートする。

平家物語は、石岡にもゆかりの深い物語である。講談風の語り朗読に魅せられた兼平さんが、生涯をかけて平家物語を語りきって頂けたらと、大いに期待している。少し語りが進んできたら、小林さんに「建礼門院右京大夫集」にある恋歌を語りの間に舞ってもらおうのも面白いかなと思っ

ている。
元警察官で、筋トレを趣味としていた不器用で無骨一方との印象の兼平さんが、講談風語り朗読に興味を深められ、平家物語を全句朗破しようという目標をもたれたことは、最近では滅多に感じられない愉快である。私もこれを機に、改めて全句を朗破してみたいと思う。

昨年、白石加代子の「百物語」シリーズに平家物語・壇ノ浦の段の朗読劇を観たが、トツトツと無骨に講談調に語り朗読する兼平さんには、洗練された語りには感じられない、平家物語の哀れを表現してくれるのではないだろうか。

これまでアマチアの人に教えたことがなく、手取り足とりと云った風な教え方が出来ない。またやりたくもない。自分でやってみて、工夫してみ、調べてみて、自分で表現してみる。それに対して、きちんと評価しアドバイスする、そんなふうにししか教えようのない世界である。朗読する前に、自分を作文する。そう言うだけ

で翌日から来なくなる。私としたり、そういう人は来ない方が助かる。変な教室であるが、自分で目標を定め、やってみたいと思う目標が出来たら、徹底的に付き合う。
兼平さんの平家物語にはとことん付き合ってもりだ。実に愉快である。

雨露の風語り

草風亭雨露

一行文詩の基本的な心構えは、眺めている、感じている風や景色から言葉をもたらすことである。風景は、そこに一緒にいると実に沢山の言葉を発してくれる。風や景が発してくれている言葉を拾うのが一行文詩だといえる。

自分自身の屈託する裡の問題であっても、風や景は敏感に覺って、囁いてくれる。その言葉を、素直に拾うと詩になるのだから不思議と言うか面白い。心を愉快にしてくれる。

一輪ざしに活けた梅の枝が、真夜中、暗闇の中に己の鬱屈した恋心を薄っすらとした香となつて囁いてくれる。そして、その囁きを文字という言葉に拾い、紙に落としてやる。

目ざめれば梅一輪の灯りは白く香る

こんな言葉を拾ってみると、梅の灯りの白く香るは、こちらの心を見透かして、いろいろな言葉を囁きかけてくる。その言葉は、いつか見た風景を映すものであったり、いろいろな味覚を持った言葉であったりする。そうしたらそれらの囁く言葉

のすべてを拾って、紙に落としてやる。
風景に一つの言葉を聞き、拾うと次々と、五句、六句、十句、二十句と目の前が風景をつぶして、言葉だらけになる事がある。

- ・へふへふと歩いて 満月の笑つてゐる
炬燵に首までもぐり込み 梅花一輪
- ・梅も咲いたし路の臺も喰つた
- ・君を好きになつてはる 苦き路のとう
- ・梅一輪の香に夜をぬすまれて
- ・朝もやに梅の香のにぎやか

ともかくにも目の前が全て文字の言葉に埋め尽くされた風景になってしまうのだ。目の前が本当に文字に埋め尽くされてしまうと、そこにはもう風は無くなり景だけになって死んでしまう。

編集後記

鬼の攪乱で何年振りかで風邪をひいてしまった。三寒四温ではなく毎日の大振幅で体が着いていけなくなってきました。高齢ではないあなたも、油断禁物。花粉症の方、いよいよあなたも主役となります。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com>

朗読舞劇団「ことば座」

ことば座は、ふるさと「常世の国」の暮らしの歴史を大切に考え、明日の希望の物語を朗読舞に表現する劇団です。朗読舞は、ふるさと「常世の国」に生まれた全く新しい舞台表現です。朗読を「手話を基軸とした舞い」に演じる小林幸枝は、世界でただ一人、朗読を手話に舞う女優です。ことば座は、ギター文化館を発信拠点として朗読舞「常世の国の恋物語百」に挑戦しています

2010年ギター文化館定期公演予定

第18回定期公演 6月18,19,20日

第19回定期公演 11月19,20,21日

その他、8月には薪灯りによる朗読舞を計画中です。

ことば座では三年間の第一ステージの活動を終了し、本年より第二ステージの活動となります。ギター文化館以外での公演等の活動も積極的に展開してまいります。詳しくはことば座事務局までご連絡下さい。

「ことば(言葉)」とは、「心を口に繁らす」ことをいいますが、心とは真実、口は表現の手段、葉は紡ぐことをいいます。「ことば座」は、この言葉の原義に基づいて、物語に紡がれてある真実としての未来の夢を朗読と手話を基軸とした舞という二つの言語によって、自由で自在な舞台表現を創造しています。

ことば座が取組んでいる朗読舞及び朗読舞劇は、日本の古典芸能である能や人形浄瑠璃をヒントに、語り朗読を手話言語をベースにした舞技で演じるというもので、脚本：演出家の白井啓治が女優小林幸枝のために創案した石岡に生まれた新しい舞台表現です。

ことば座 〒315-0013 石岡市府中 5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

E-mail: shirais3maple.ocn.ne.jp

朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優及び朗読舞俳優志望者を募集しております。研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂きます。研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

募集要項

募集：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース
募集人員：6名程度（最大10名まで）
面接及び朗読と簡単な演技表現試験有り
養成期間：1年間（入塾は随時受付ています）
指導月4回
受講料：月額30,000円（全・半納割引有り）

詳しくは、ことば座事務局までお問い合わせください。

舞台衣装等のデザイン・製作に興味があり、ことば座にボランティア参加して頂ける人、募集しております。

現在舞台背景画担当として風のことば絵作家の兼平ちえこさん、舞台装美として小林一男さんの参加を頂いております。

興味のある方、事務局の白井までご連絡下さい。

ことば座 〒315-0013 石岡市府中 5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

E-mail: shirais3maple.ocn.ne.jp